三三三号　平成二十二年四月二十日　――長崎歴文協短信――

ながさきの空

龍馬・長崎雑記帳

織田　毅

一、長崎にあった龍馬の手紙

坂本龍馬は筆まめな人だったらしく、郷里の家族や友人らにあてた手紙が現在でも一四〇通ほど確認されている。ところが、長崎には龍馬の手紙をはじめ関係する史料がほとんど残されていない。これほど龍馬に関係が深い土地にしては、残念というほかはない。

龍馬と親交が深かった小曽根家には、かなりの数の手紙や史料が残されていたと思うのだが、長い年月の間に失われてしまったらしい。小曽根家にあった龍馬の手紙の中には、「西洋足袋」(靴下)や「泡の出る酒」(ビール)への礼状もあったと伝わる。また、丸山町の「史跡料亭花月」には、龍馬の手紙(長崎奉行所あて抗議文草稿)が残されている。慶応三年九月十日に書かれたもので、長崎に現存する唯一の貴重な、龍馬の筆あとだ。

風頭公園の坂本龍馬像

ところで、明治時代の長崎には、もう一通、龍馬の手紙が存在した。それは、慶応三年八月八日付、兄・坂本権平あて、イカルス号事件の最中に土佐で書かれたもの。長崎の人が、坂本直寛(権平の甥で、養子となる)から譲られ所有していたようだ。

この手紙は、明治三六年(一九〇四)一月一日、長崎の「東洋日の出新聞」に写真木版印刷で掲載され、のちに坂本家に戻されたらしいが、現存していない。先年、明治時代の新聞にのったこの手紙の存在を、亀山社中ば活かす会・堺屋修一氏が発見され、「幻の手紙を発見」と大きな話題をよんだ。

二、龍馬ゆかりの聖福寺

亀山社中、花月、グラバー邸、聖福寺。何のことかお分かりだろうか。どれも、長崎に今も残る龍馬ゆかりの建築物だ。

亀山社中は、もともと亀山焼の関連施設として建てられたとされるもので、長崎市が復元整備工事を行い、平成二一年に「長崎市亀山社中記念館」として公開している。龍馬の亀山社中が置かれたという建物である。

花月は、今も残る庭園とともに江戸時代をしのばせる建物で、風格のあるたたずまいが印象的だ。元海援隊士の関義臣は、「(龍馬は)隊士等を率いて、玉川、花月などへ登楼した」、と回想している。

グラバー邸は、亀山社中とも取引があったイギリス商人グラバーの居宅跡。わが国最古の木造洋館として国の重要文化財に指定されている。

聖福寺は、江戸時代初期に創建された名刹。この寺が龍馬とゆかりがあるのは、慶応三年五月に、いろは丸沈没事件の談判がおこなわれた場所だからだ。そして、他の建物と異なる点は、同時代の史料から龍馬が実際に行ったと断定できる、唯一現存する建物ということだ。その史料というのは、土佐商会員の池道之助の日記で、こういう記述がある。

「一、(五月)廿二日、天気、後藤様・横山・予・常作・才谷梅太郎・尾谷孝蔵、四、五人連ニて聖福寺へ行、紀州ノ藩と談判致ス」。

この聖福寺も近年建物の傷みが激しく、修復の必要があるという。龍馬ゆかりの深い建物を、ぜひ後世に残しておきたいものだ。

三、龍馬嫌い

世の中には、熱烈な龍馬ファンがいると同時に、龍馬が嫌いな人間も確かに存在する。たとえば、龍馬の業績を頭から認めようとせず、『竜馬がゆく』は完全なフィクションと断言してはばからない人、その他もろもろだ。ある意味、龍馬に対する興味の表れと言うべきだろう。そして、その中間とも言うべき「龍馬無関心層」もまた存在する。言うまでもなく、世の中の人全部が、龍馬が好きでなければならない理由は全くない。

ところで、長崎においては、今まではこの「龍馬無関心層」が大部分だったと、私は思っている。「龍馬」を「リュウマ」と読んでいる人が多かったし、どうして長崎に龍馬像があるのか合点がいかない人がたくさんいた、と推測している。

この傾向は、長崎では今に始まったことではなく、幕末・明治の頃からの傾向だ。いや、当時は無関心どころか、多分に「龍馬嫌い」だったようだ。明治元年、長崎に「振遠隊」という民兵組織ができるが、その隊長は元海援隊士だった。長崎の人達には、面白くなかっただろう。

龍馬への無関心は、その後も続く。長崎の代表的な歴史家・古賀十二郎氏の生家は福岡藩御用達商人で、イカルス号事件のときは当主が奉行所に呼び出されて夜遅くまで帰宅せず、家族一同心配したそうだ。そのためか、古賀氏は龍馬に積極的に関心を持った形跡がないようだ。その後も同じ傾向が続いたが、それが長崎での龍馬研究の遅れにつながったのではないだろうか。

(現代龍馬学会会員)

風信

○四月と言えば入学式に始り、花まつりと続く。そして私達の事務所から見える風頭山の楠若葉が一番美しい季(トキ)である。

○先日、韓国KBSテレビ局の金鐘石課長を中心に「日本の近代化発祥地となった長崎」を主題に取材に来訪された。五日間・長崎に滞在されるとの事。其の取材内容も昔・長崎にあった高麗町の事や、「一六一〇年朝鮮の人達が建てた教会跡は?」等と専門的な質問も多く熱心な取材で大いに感心させられた。

○次に、長崎の四・五月と言えば私達、戦前の時代の者には「ハタあげ」があった。長崎ぶらぶら節にも「ハタあげするなら　コンピラ・カサガシラ　帰りは一パイ機嫌でヒョウタンぶらぶら」と唄う。一八〇〇年頃編纂された長崎名勝図絵に「春になると長崎の人達は、大人も子供も重箱に御馳走を入れて山に行き、ハタをあげる。その場所は四日は金ヒラ・十五日は風がしら。二十五日は合戦場・二十八日は准提観音(ジュンディ)とある。ハタには「ビードロよま」をつけてあげ、対手のハタと勝負する。「ハタあげ」には今も昔の言葉が多く残っている。例えばツブラカシ、ヤダモン、ネヨマカスリ、ヨマツケ等々があり、ハタの模様も一二〇種類もあって面白い。(参考資料・渡辺庫輔著　『長崎ハタ考』)

○五月四日(火)恒例により「県九條の会」と共催し、青少年を中心に長崎史跡を訪ねる。集合・午前十時(馬町諏訪神社下)。コース・龍馬が歩いた亀山社中・上野撮影局・料亭藤屋跡など。(会費不要〔講師〕　餅田・田中・松澤・平野・越中他)

○五月十五日(土)午後二時より、本年度純心大学食文化研究講座を桜町勤労福祉会館にて開催。演題・「長崎シュガー・ロード」。講師・越中哲也。自由に御参加下さい。(会費不要)

○今月は次の本を御寄贈いただいた。

『江戸文人と明清楽』中尾友香利女史・数年来研究を続けてこられた学位論文を集大成されたもので、長崎の文化に深い関係があり非常にすぐれた珍らしい論考であった。(汲古書院刊・一〇、〇〇〇円)

『ある宇和島藩士の係譜』小波盛佳氏著。小波氏の祖父は明治初期の長崎画檀を指導された小波魚青画伯で、著書により色々の事を教えて戴いた。(著者は千葉市在住。工博・小波技術士事務所長)

『幕末―写真の時代―』(再販)小沢健志編　私(越中)も「長崎編」を担当させて戴きました。(筑摩書房　一二、〇〇〇円)

カット　中村　繁勝　なんばんえびす

長崎歴史文化協会研究室
TEL八二一一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F